

五代目笑福亭松鶴落語における 原因・理由表現の用法

矢 島 正 浩

1. はじめに

筆者は矢島（2006）において、仮定表現を指標とした場合の、五代目笑福亭松鶴落語の録音資料と速記資料の質的な相違を検討した。その検討を通じて、近代大阪語における仮定表現に関して共時的な研究としての知見が得られることに加えて、両資料の比較から、実態として、音声言語に「革新」性、文字言語に「保守」性とでもいべき面が認められること等を指摘したものである。

同じ松鶴落語でも、原因・理由表現を指標とするとまた異なった面が見えてくる。本稿では、まず原因・理由表現の特徴として表現者によって大きく異なった表現形式を取る傾向があることを明らかにし、その上で、松鶴落語においては、録音資料という音声言語と速記本という文字言語の媒体の違いに加えて、速記本には五代目松鶴以外の者の口語意識の介入が見られること、また原因・理由表現の用法上の特徴を踏まえることで言語資料としての松鶴落語に関わる資料研究が可能になることを論ずる。

なお、原因・理由表現の用法について、例えば各接続助詞による従属節が構成する文法的な相違などについては稿を分けて論ずる必要があると考え、本稿では扱わない。

本節で取る調査方法はすべて矢島（2006）にならう。調査資料には、五代目笑福亭松鶴によるSPレコードの吹き込みと速記本とが、同一の演目において残るものとして「天王寺詣り」「船弁慶」「くしゃみ講和」を取り上げる。それぞれのテキストは次による。

○SPレコード

- ・「天王寺詣り」タイヘイ・昭13（1938）年発売〔録音時間19：16〕：①
 - ・「船弁慶」キャニオン落語大全集・昭和初期（発売年不明）
〔録音時間13：35〕：②
 - ・「くしゃみ講和」ダイヤモンド・昭10（1935）年発売
〔録音時間12：51〕：③
- …以上、①はCD-ROM「古今東西噺家紳士録」、②は「ご存じ古今東西噺家紳士録」（いずれも株式会社A P Pカンパニー）の再録音源を使用。

○速記本（雑誌『上方はなし』より）

- ・「天王寺詣り」『上方はなし』11集 昭12（1937）年3月発行
- ・「船弁慶」『上方はなし』26集 昭13（1938）年6月発行
- ・「くしゃみ講和」『上方はなし』45集 昭15（1940）年4月発行

S Pレコードについては、筆者の責任において一度文字に起こしたものを資料に用いる方法とする。

2. 『上方はなし』の成り立ち及び本稿で注目すること

2.1. 『上方はなし』における「速記」とは

速記本の掲載される『上方はなし』は五代目笑福亭松鶴の主宰により編集・発行された機関雑誌である。ただ速記本の成り立ちについてはよくわからないところが多く、いかなる速記者によったものか¹、演述をどういう形で書き取ったものなのか判然としない。

手がかりが、しかし全くないというわけではない。『上方はなし』の編集後記や雑誌中の記事には、この速記本の成り立ちに関して参考となる情報が記されている箇所もある。

- 1) 20集 編集後記（「中浜生」（中浜静圃＝四代目桂春団治）署名）より抜粋
 今度は松鶴氏の演題に「尻餅」を撰んでもらった。先代譲りのお家物である。何しろ形で見せる個処が非常に多いので、（ ）を用いてト書きじみた拙い表現法を、なるべく採りたくないと思うところから、彼の比較的短い落語を写すのにもかなりの苦心がいった。（中略）校正に際しても数回実演してもらったぐらいである。
- 2) 22集 編集後記（「中浜生」署名）より抜粋
 松鶴氏に願った「鋏瀉」。これまた校正に今一工夫の余地が充分ありましよう。
- 3) 23集 編集後記（「中浜生」署名）より抜粋
 「百年目」松鶴氏としてはごく珍しい出し物です。先月に懲りて今度は充分入念に筆写したつもりです。ある程度の良心をもってすれば、落語を紙上に生かすのは筆写より他に方法はありません。この意味で従来出版されていた速記本は、小誌の落語よりはるかに杜撰な、不親切なものだといいきっても、おそらくどこからも苦情は出まいと思います。むろん、演者の苦労は速記の場合と比較になりませんが。
- 4) 24集 野崎万里「『上方はなし』二年を見る」の記事より抜粋
 松鶴君の落語も、静圃君が手を入れるとっては語弊があるが、筆記するようになってからは、原意をくずさずしかも読みものとしても調子のあつた読みいい、がっちりとした内容のものとなってきたことを特記したい。

5) 33集 編集後記（「堅丸生記（＝野崎万里か）」署名）より抜粋

落語も松鶴十種の内「高津の富」として、松鶴師が三年間とっておきの至宝篇を出してもらいました。一字一句おろそかにせずと松鶴師が書き上げられたものです。

6) 36集 編集後記（「野崎万里」署名）より抜粋

松鶴君の「三十石」はこの記年号にふさわしい長篇で、この名作が「三十石」を家の芸とする松鶴君によって文字に移されたことは、何とでもうれしいことである。一つの経文を文字にするためにわざわざ天王寺まで出かけてきた、と松鶴君がいうほど苦心のものである。

これらより、明らかとなるのは、『上方はなし』に掲載される速記本が、いわば口演という一回の音声を逐語的に直写して成るのではなく、読み物としての完成度を考え、苦心の「校正」を経て成ったものだということである。さらにその速記者は様々であって、少なくとも20・23・24集には中浜静圃が筆を執ったことが記され、33・36集分については松鶴自身が筆録していることが明記される。ただし、ここに掲げたような、速記者の特定につながる記事は残念ながら稀であり、大部分については推定によらざるを得ないのが実情である。

2.2. 速記者についての推測

一方、主として編集に携わった者については、もう少し正確な整理が可能である。上記1)～6)の記事を始めとする『上方はなし』の編集後記の記事内容や執筆者などの諸情報をあわせると、次のごとくであることがおおよそ推定される。

1・2集：沓脱英介

3-16集：松鶴（10集以降、中浜静圃の関与が増えるか²⁾）

17-30集：中浜静圃

31-35集：堅丸（野崎万里か³⁾）

36-46集：野崎万里

47-49集：中浜静圃

47集に、それまでの編集者・野崎氏の急逝により、急遽編集の担当に戻ることとなった中浜氏の編集後記があり、その中に過去の編集担当を交代した経緯について振り返る記事がある。

○さいわい各位の支持を得て歪みなりにやり続ける中に、何とも小五月蠅い問題が起きたものだからいやになって、無責任にもゴリ押しからバトンを再び野崎に押つけて引き退った。時に三十一集。

32集の伊勢三郎「桂米之助に与う」（二代目米之助＝中浜静圃）の記事にも、その頃、急速にこの雑誌との距離を置く中浜静圃に対して、「過去一年半、君が手塩にかけて成長させてきた『上方はなし』に対する情熱を、今一度呼び戻してくれ

ることを僕は切望したのである」としている。

中浜静圃は『上方はなし』の編集者としても速記者としても大きな役割を果たした人物である。その中浜氏の関わり方を軸に時期を区切ってみると、おおよそ1～[10～16]集頃までの関与の様子が前面に出てこない前期があって、それから30集まで最も明確な関わりが認められる中期が続き、更にそれ以降の遠ざかった時期である後期、続いて雑誌の末期にあたる47-49集と捉えることになる。

編集者としての位置付けが、速記本の筆録者と直接結びつかないのは言うまでもない。しかし、今ここで中期とする時期に編まれた上の引用1)～4)には中浜氏が速記本を執筆したことを明記する記録が続くのに対し、松鶴が筆を執ったとされる記事がある引用5)6)は、いずれもここでいう後期、すなわち中浜氏が『上方はなし』から離れた時期に当たるものである。本節で取り上げる漸においては、速記者に関わる記載は一切なく不明であるが、ちょうど前期(「天王寺詣り」11集)・中期(「船弁慶」26集)・後期(「くしゃみ講釈」45集)のそれぞれにあたる時期に刊行されていることは、検討の上で念頭におくべきであろう。つまり、速記本において、この三話で速記者が一致しない可能性が高いこと(ただし、前・中期分にあたる「天王寺詣り」「船弁慶」は同一者である可能性もある)が、その言語使用においてどのような影響として現れるのかということである。

以下、大きくは二点、こうして成る文字資料と松鶴によって語られた音声資料とがその表現においてどのように異なるのか、また、速記本の編集に関わる者の変化が、文字資料として何らかの相違をもたらしているのかどうかについて、具体的な言語の用法を通して観察してみることにする。

3. 原因・理由表現の使用上の特徴

3.1. 文字資料で多くなる傾向

五代目松鶴の、今回の調査資料を対象とした文字資料・『上方はなし』とSPレコードに録音された音声資料とは、内容・ストーリーは一致しているところが多いとはいえ、基本的には文字資料の方が詳しく、分量も多めになる。このことには、「当時のレコードの場合は、極々限られた時間内に、ともかく、話をまとめねばならなかったので、おそらく平素とはかなり異なる刈り込みをした演出をしなければならなかった」(清水1984)ことが関わっている。その結果、同一の言語事項を調査しても概して文字資料の方が用例数は多い。

ただしその状況は、各表現によって偏り方が異なり、文字資料の方が表現量が多い分、比例的に多くなるというような単純なものではない。そのことを原因・理由表現と仮定表現、さらに参考として断定表現及び否定表現を取り上げて比較することで示してみる。調査対象は、「天王寺詣り」「船弁慶」「くしゃみ講釈」の三演目である。

表1 SPレコードと『上方はなし』における各表現の用例数比較

	原因・理由 表現	仮定表現	否定表現	断定表現
音声資料	47	153	126	170
文字資料	95	207	186	209
文字／音声	2.02	1.35	1.48	1.23

速記本での使用度数が、録音資料のそれと比べて断定表現で約1.2倍、仮定表現や否定表現でも約1.4～5倍であるのに対し、原因・理由表現のみ2倍を超える。

この結果から分かることは、音声言語と文字言語とで、原因・理由表現は表れ方に違いがあり、他の表現に比べて原因・理由表現は、文字言語にて多用される傾向があるということである。言い換えれば、文字資料という、音声資料に比べて表現を選択し、吟味する過程を多く含む資料の方で、この表現は多用されている事実があるということである。当然、その分、話しことばの再現性という点においては、異なった要素を含みやすいものであろうことが予想される。

3.2. 音声資料における噺家による違い

3.2.1. 四～六代目笑福亭松鶴の場合

速記本の検討に先立ち、音声資料の演者による相違をみておきたい。本稿で調査対象とする演目のうち「天王寺詣り」については、五代目笑福亭松鶴だけでなく四代目・六代目笑福亭松鶴による録音資料が手元にある⁴。それぞれの生年、録音年及び録音時間〔分：秒〕は次の通りである。

- ・四代目笑福亭松鶴 明治2（1869）年生、大正末（1925）年頃録音〔6：13〕
- ・五代目笑福亭松鶴 明治17（1884）年生、昭和13（1938）年録音〔19：16〕
- ・六代目笑福亭松鶴 大正7（1918）年生、昭和49（1970）年録音〔26：17〕

ここでは「天王寺詣り」中の原因・理由表現を、五代目松鶴に先行する四代目、および後の時代の六代目がどのように語るかという視点から比較を試みる。以下に、調査結果を示す。

表2 「天王寺詣り」における原因・理由表現用例数

噺家	カラ	サカイ (ニ)	デ	ノデ	ヨツテ (ニ)	(他)	(計)
四代目		3		1			4
五代目	3		6		6	2	17
六代目	1	23	1			1	26

用例数が少ないため検討には注意を要するが、表2に示すとおり、同じ笑福亭松鶴による同じ演目の噺でも、何代目の松鶴なのかによって、使用する接続助詞はかなり異なっている。概括的に捉えれば、四代目・六代目の使用はサカイ（ニ）を中心とするのに対し、五代目はそれ以外の各接続助詞を広く用いるという相違

が認められる。

ところで、ヨッテ(二)とサカイ(二)に限定すると、歴史的にはヨッテ(二)が先行し、サカイ(二)が後から発達してきたものであることが明らかにされている。例えば小林(1977)は中世から近世期の文献の精査を踏まえて、近世期はヨッテ類が隆盛期を迎える一方で、サカイ類が一定範囲に止まる勢力しか得られなかったこと、サカイ類の伸張は明治・大正・昭和という世代を経なければならなかったであろうことなどを述べる。金沢(1998)では本稿で取り上げる『上方はなし』、さらには近代大阪落語をも広く調査された上で、両表現の使用状況について「大正～昭和においては、(多分、拮抗期を経た上で)徐々にサカイ系がヨッテ系を圧倒してきたものと考えられるのではなからうか。(153頁)」とする⁵。また彦坂(2005)では、原因・理由表現の全国分布を示すGAJ(国立国語研究所編『方言方法全国地図』33図など)は、ヨッテ類の後でサカイ類が伸張したと解釈できるとする。

しかし、少なくとも四～六代目の笑福亭松鶴の落語においては、これらの先行研究が指摘するような新旧関係、すなわち例えば四代目がヨッテ(二)を多用し、五代目、六代目となるにつれてサカイ(二)が増えるというような実態を示さない。四代目から六代目では生年に50年ほどの開きがあるにもかかわらず、この状況にあることは少々わかりにくい。この調査範囲で偶然に捉えられる現象に過ぎないのか、あるいは、近代大阪語においては、各接続助詞の勢力配置は、大局的な歴史的前後関係とはまた別な、異なった事情において捉えられるべきものなのであろうか。

ここで現代大阪語における原因・理由表現に関して、共時的なあり方に言及した諸研究を参照してみる。

- i) 理由を表す助詞 「サカイ(二)」と「ヨッテ(二)」がある。若年層はもっぱら「カラ」を使うが、「シ」もある。(平山1997: 51)
- ii) 「雨が降るから」のカラに当たるのは、中心部ではサカイ・サカイニが最も優勢で、(中略)中心部でもサカイ以外にヨッテを使うことも多く、ノンデ・モンデ・ンデ・デを使う所は周辺部に案外多い。(楳垣1962: 56)
- iii) サカイ(二)とヨッテ(二)は全く勢力伯仲して用いられる。この両者には、男女・老幼・地域・あるいは理由・原因の主観性客観性等の上から何らの区別もみられず、両者全く同じ機能に用いられている。ノンデ(ンデ)は、前二者に比べて、理由・原因のさし方がそれ程強くない。(山本1962: 483)

つまり現代という軸においては、サカイ(二)とヨッテ(二)を始めとして、

その他にカラ・ンデ・デ類が位相・地域を異にして使用される状況にあり、各語形がそれぞれの事情の下で並列している状況があるということである。特にiii)にあるように、サカイ(二)とヨッテ(二)の並列に関しては、共時的には、その使い分けについてははっきりしたところはよくわかっていないということのようである。そうであるとする、前節で見た三代にわたる松鶴落語の状況も、近・現代大阪語の実態をそのまま映すものであった可能性もまた高いといえる。

3.2.2. 他の噺家の場合

参考までに、他の噺家の使用状況について示してみる。調査には『二十世紀初頭大阪口語の実態—落語SPレコードを資料として—』平成二年度一般研究(B)報告書(研究代表者・真田信治)掲載の31話(明治36~大正15年頃録音)を用いた(以下、「明治末~大正期落語」と称する)。噺家、生年は表中に示すとおりであり、明治後期から大正期の大阪落語の実態が概観できる資料内容である。なお同資料には四代目笑福亭松鶴が収載されるが、本稿の調査と演目は重複していない⁶。

表3 噺家別、原因・理由表現の使用状況

噺家	生年	録音年	カラ	サカイ (二)	デ	ノデ	ヨッテ (二)	(他)	(計)
曾呂利新左衛門(二代目)	1844	1903~	26			6	27		59
		1911	44%	0%	0%	10%	46%	0%	100%
桂文枝(二代目)	1844	1911	2			2			4
			50%	0%	0%	50%	0%	0%	100%
桂文団治(三代目)	1856	1912頃		3	1	3		1	8
			0%	38%	13%	38%	0%	13%	100%
桂文三(三代目)	1859	1903	2			1			3
			67%	0%	0%	33%	0%	0%	100%
桂枝雀(初代)	1864	1903~	1	10	2	1		1	15
		1923	7%	67%	13%	7%	0%	7%	100%
林家染丸(二代目)	1867	1923	4	8	1	4	1		18
			22%	44%	6%	22%	6%	0%	100%
笑福亭松鶴(四代目)	1869	1907~	2	7		2	2	1	14
		1926	14%	50%	0%	14%	14%	7%	100%
桂文雀	1870	1923	6	8		1			15
			40%	53%	0%	7%	0%	0%	100%
(計)			43	36	4	20	30	3	136
			32%	26%	3%	15%	21%	2%	100%

この表から、サカイ(二)、ヨッテ(二)に緩やかな新旧関係が読み取れなくもない。特に、曾呂利新左衛門に一際ヨッテ(二)が多い点を重視すれば、それまで勢力を持っていたヨッテ(二)が、明治末から大正期にかけては衰退期にあったと捉えやすくなる。

しかし、より生年の新しい林家染丸、笑福亭松鶴(四代目、さらには表2に示した五代目)にヨッテ(二)を使用している事実がある。また、サカイ(二)が既

に江戸期から用いられてきたものであるにもかかわらず、上記調査範囲に使用がゼロの噺家もいる。サカイ（ニ）やヨッテ（ニ）を用いず、カラ・ノデを多く用いる噺家も多い。

これらの事情をすべて勘案すると、この範囲で使用される各接続形式の全体を、単純に歴史的な推移の観点のみで捉えるのは難しいことがわかる。調査が落語資料に限られているという制約があるにせよ、原因・理由表現の使用については、明治末～大正期の頃から、個人差が大きいものであったという面を認めておく必要があると考える。

4. 五代目松鶴落語による音声資料対文字資料の使用状況

4.1. 使用概況

続いて録音資料と速記本という音声資料対文字資料の比較を行う。ここでは同一演目について録音資料と速記本の両方がある五代目笑福亭松鶴のみを調査対象とする。両資料における原因・理由表現の使用状況を、以下の表4に示した。

表4 五代目松鶴落語における音声資料と文字資料の差

	カラ	サカイ (ニ)	デ	ノデ	ユエ	ヨッテ (ニ)	(他)	(計)
音声 資料	5 11%	2 4%	9 19%	4 9%	0 0%	24 51%	3 6%	47 100%
文字 資料	7 7%	19 20%	4 4%	31 33%	3 3%	29 31%	2 2%	95 100%

最初に、先に各噺家の使用状況を示した表3と、表4のうち五代目松鶴の音声資料分の調査結果の比較から、五代目松鶴の特徴を明らかにしておく。一見して、次の点が特徴としてあげられよう。

- ・サカイ（ニ）の使用が少なく、ノデも少なめであること。
- ・ヨッテ（ニ）、デがかなり多いこと。

特にヨッテ（ニ）の使用の多さについては、表3中において最も多く使用していた曾呂利新左衛門よりも使用率が高く、サカイ（ニ）の使用の少なさとともに注意すべき状況にあることが確認される。

五代目松鶴が、原因・理由表現の使用に関してやや特殊な傾向を持つ者であることを念頭においた上で、音声資料の状況と文字資料の状況とを比較してみる。

- ・音声資料に比べて文字資料で使用率を増やすもの
サカイ（ニ）・ノデ
- ・音声資料に比べて文字資料で使用率を減らすもの
デ・ヨッテ（ニ）

これによって明らかになるのが、五代目松鶴固有の特徴であるとした点がごとく緩和される形で、文字資料である速記本は成っているということである。

このことから、速記本が松鶴以外の手によって成ったという見通しの適切さが改めて確認されよう。原因・理由表現については、言語条件（話者・筆録者／音声・文字）によって容易に使用状況が異なるものらしいということを3節で見た。また3.2.1.のi)～iii)の諸先行研究では、文法的な用法上の使い分けが顕著なものではないことを指摘していた。そうであるとする、用法上の存在意義がそれぞれでそれほど明確でないために、表現者の相違という言語条件の影響が直接に表れるものとして用いられていたということなのかもしれない。

4.2. 演目別使用状況

前節で一括しているデータを、演目ごとに区別して示してみる。

表5 演目別使用状況

資料	カラ	サカイ (二)	デ	ノデ	ユエ	ヨッテ (二)	(他)	(計)
音声資料	天王寺	3		6			6	2
	詣り	18%	0%	35%	0%	0%	35%	12%
	船弁慶	2	2	2	1		14	1
		9%	9%	9%	5%	0%	64%	5%
	くしゃみ			1	3		4	
	講釈	0%	0%	13%	38%	0%	50%	0%
(計)	5	2	9	4		24	3	
文字資料	天王寺	7	2		7	3	3	1
	詣り	30%	9%	0%	30%	13%	13%	4%
	船弁慶		16	1	11		22	1
		0%	31%	2%	22%	0%	43%	2%
	くしゃみ		1	3	13		4	
	講釈	0%	5%	14%	62%	0%	19%	0%
(計)	7	19	4	31	3	29	2	
	7%	20%	4%	33%	3%	31%	2%	

「くしゃみ講釈」のノデの使用についてまず除けて考えると⁷、五代目松鶴による音声資料は文字資料と比べて、原因・理由表現の使用傾向は比較的似通っていることが見えてくる。すなわち、サカイ(二)が少なく、ヨッテ(二)が多いこと、デが目立つことという特徴が共通して見られるのである。

一方の速記本の方は、作品によって特徴が異なる。目立ったところを記すと次のとおりである。

- ・天王寺詣り：唯一ユエの使用がみられる。カラの使用も目立つ。
- ・船弁慶：サカイ(二)の使用が最も目立つ。速記本の他の話に比べてヨッテ(二)が多い。
- ・くしゃみ講釈：ノデの使用が目立つ。

このように速記本の方でややばらついた用例分布が認められることについては、速記本の成り立ちにおいては複数の者が関与していること、そして原因・理由表

現がそれぞれ個人の特徴を反映しやすいものであって、それら個人の表現指向を映すがために生じたものであることが関わっているとみる。

さらに同一演目で音声資料と文字資料とを比較した場合も、同一内容を語るものでありながら、いずれも、似通った使用傾向を示すとは言いにくい状況にある。「天王寺詣り」は文字資料にのみサカイ(二)・ノデ・ユエを用いるなど隔たりが大きく、「船弁慶」も同様に文字資料でのサカイ(二)・ノデの使用が目立つ。ただ「くしゃみ講釈」は、サカイ(二)の少なさ、デ・ヨッテ(二)の使用の様子などの点において、比較的音声資料と似た面がないと言えなくもない。もちろん、文字資料の方でノデの多用という事実がある⁸ので、その点をどう捉えるかで判断は変わってくるところではある。

「くしゃみ講釈」の速記本は、先にも見たように中浜氏が『上方はなし』の編集から遠ざかった後期に、執筆されたものである(2.2.参照)。同時期には、松鶴自身が速記本の筆を取ったことが明記された集もある(2.1.に引用した編集後記5)・6)参照)。その状況と、上に見る原因・理由表現の使用法とから、あるいは「くしゃみ講釈」も松鶴自身がその速記に関わっていた可能性もあるのではないかという仮説を立てることもできる。他の言語使用の状況などもあわせて、今後検討してみる価値がありそうである。

5. 類似表現の使用傾向より

5.1. 注目点

各表現形式の具体的な使い方から、資料の特徴を見てみる。ここでは資料としての特性、すなわち表現に関わった個人の特性が出やすいものとして、同一の内容でも二通りの表現が可能なものに注目する。具体的には、次のような、ノ・モノ+断定の助動詞+接続助詞を取るものである。

- ・(お松) こちの人、晩のお菜にするのやよってに焼豆腐買うて来とう、
(速記本・船弁慶26集・663・上16)
- ・(喜六) 余り出たり這いったりするもんやさかいに、下駄で蹴ってやろうと、
(速記本・天王寺詣り11集・192・上20)

このように、ノ・モノに断定ヤを介してサカイ(二)が続く表現は、例えば次のようにノ・モノを除いて、ほぼ意味を変えずに用言性述語を受ける形式に言い換えることができる。

- ・こちの人、晩のお菜にするよってに焼豆腐買うて来とう、 (作例)
- ・余り出たり這いったりするさかいに、下駄で蹴ってやろうと、 (作例)

もちろん両者が持つ意味合いが完全に等しいというわけではなく、例えばモノを介することによって従属節の内容を情意的に取り上げる効果が添えられることなどがあると考えられる。しかし、日本語として不自然になってしまうような、

あるいは意味が大きく隔たるような違いは生じない。

この点に注目し、いわば、活用語を述語とする従属節によっても表現できるものを、ノやモノによって非活用型の従属節で表現する方法を取る度合いが、どのように違うかという点から、資料の特徴をみることにする（以下、ノ・モノ＋断定＋接続助詞の形を取る条件句を「非活用型従属節」と呼ぶ）。

5.2. 非活用型の従属節を取る傾向から

以下は、ノ・モノ＋断定＋接続助詞の形を取る非活用型従属節の使用状況を示したものである。ここでは、笑福亭松鶴と明治末～大正期の噺家の状況（調査範囲等は3.2.2.を参照）を併せて示す。松鶴については、音声資料（「天王寺詣り」）中の状況をそれぞれ四～六代目について記し、また改めて五代目松鶴については、音声資料と文字資料それぞれ（「天王寺詣り」「船弁慶」「くしゃみ講釈」）中の状況を示す形とした。

表6 噺家別、資料の種類別、非活用型従属節の使用状況

資料		カラ	サカイ(ニ)	ヨッテ(ニ)
明治末 く	の	曾呂利新左衛門(二代目)		1
		林家染丸	1	2
		笑福亭松鶴(四代目)		1
		桂文雀		2
大正 期 落 語	もの	曾呂利新左衛門(二代目)	2	1
		桂文団治(三代目)		1
		桂枝雀(初代)	1	1
		林家染丸(二代目)	1	
		笑福亭松鶴(四代目)	1	4
「天 王 寺 詣 り」 音 声 資 料	の	笑福亭松鶴(四代目)		2
		笑福亭松鶴(五代目)		
		笑福亭松鶴(六代目)		
	もの	笑福亭松鶴(四代目)		1
		笑福亭松鶴(五代目)		
		笑福亭松鶴(六代目)		2
五 代 目 松 鶴	の もの	音声資料		
		文字資料		1
	もの		9	2

表6のうちで特筆すべきことは、五代目松鶴落語のうち音声によるものにはこれらの該当例が全くないということである（表中網掛け部分参照）。例えば、同じ松鶴でも四・六代目には使用が見られ、表6に示すようにこの表現を使用する他の噺家も少なくない。活用型従属節への置き換えがきくために、五代目松鶴の指向としてこの非活用型従属節の表現を用いなかった可能性がある。

一方、同じ五代目松鶴落語であっても、速記本の方は事情が大きく異なる。対照的に、かなりの高頻度でこの形式を用いているのである。表6で調査対象とする

明治末～大正期落語は29話であるのに対し、松鶴落語・速記本はわずか3話分と十分の一に過ぎない。それにもかかわらず、非活用型従属節使用数は、明治末～大正期落語中は全19例（ノ7例、モノ12例）、松鶴落語・速記本中には全17例（ノ6例、モノ11例）とほぼ等しく、約10倍もの頻度で用いていることになる⁹。

具体例を見てみる。実際に次のような対照的な表現例がある。

- ・（お松）うちらが暗いよってに、仕事してんね思てしゃべってたら、まーま一、着物着替えて座ってるわ。（録音資料・船弁慶155・3）
- ・（お松）内らが暗いもんやさかい、仕事してるのやとばっかり思てたら着物着替えて仕事場に平太張ってるワ、（速記本・船弁慶26集・661・下20）

これはつまり、その従属節が活用型でも非活用型でも表現可能であったところで、五代目松鶴自らの音声による語りにおいては活用型を用い、それを文字に記録する速記本では非活用型の方の表現を選択していたということである。

さらに注意されるのが、活用型から非活用型に言い改めることによって成る速記本中の17例のうち、15例までが「船弁慶」中で用いられていた（他「天王寺詣り」「くしゃみ講釈」に各1例）ことである。そうであるとする、と、「船弁慶」の速記本の成り立ちにおいて、何らかの特別な事情—例えば、この表現方法を好む速記者が書いたなどが関与していたことを疑わせよう。

以上の検討においても、原因・理由表現が個人差を映しやすい表現であるということの一端が明瞭に現れているといえる¹⁰。

6. 近代大阪語における原因・理由表現の特徴、及び原因・理由表現から見た五代目松鶴落語の資料性

以上の検討を通じて明らかになったところを振り返っておく。

まず、原因・理由表現固有の特徴として、この表現には、文字資料（速記本）の方で使用される頻度が高くなるということがあった。表現を整えようとする意識の元で出現しやすい表現ということであろうか。速記の過程において、速記者自身の判断によって表現が選ばれている箇所が増えることを意味するものであり、この点は他の表現とはやや相違することとして注意する必要がある。

また、表現者（噺家・速記者）個人によって、この原因・理由表現は使用傾向が異なりやすいという点も顕著であった。それは、四～六代目の松鶴同士、並びに明治末～大正期の噺家全体の録音資料においても観察され、また五代目松鶴の速記本（における速記者）においても見出されるものである。

五代目松鶴の音声による語りについて言えば、ヨッテ（二）を多用する者としては特異とも言える位置にあり、また活用型の従属節をノ・モノ＋断定＋接続助詞という非活用型にして表現する方法を取らない点でも特徴的であった。

速記本も五代目松鶴を写したはずのものでありながら、各演目によって使用す

る接続助詞は大きく異なっていた。そのことに関わっては、例えば、「船弁慶」が非活用型従属節の多用傾向を示したり、「くしゃみ講釈」が音声資料と類似する傾向を示したり、速記者の推定に寄与すると思われる興味深い事実があった。

ところで、このように、原因・理由表現が表現者の個人差を示しやすい表現であるという捉え方については、落語という話芸を調査対象としたことによって得られた、いわば条件付きの見解としておく必要はある。しかし、3.2.1.に引用した現代大阪語の口頭言語について報告される実態と通じる内容であることも、また事実であり、原因・理由表現について検討していく上で重要な観点になるものと考え¹¹。

本稿は、原因・理由表現の文法的な用法差には踏み込まず、各接続助詞の特徴を資料性との関係においてのみ位置付けるものであった。当然、本稿の次に、ここで見た表現者個人の特徴を超えたところに普遍的に存在する用法の問題について、論じられなければならない。また、言うまでもないことであるが、そもそも本稿は音声文字両資料を通じて笑福亭松鶴という限られた個人言語（録音）または個人言語をイメージしたカテゴリー（速記本）を出発点とした考証であった。ここで得た、断片的な知見のそれぞれについて、どの程度、普遍的なそれと連続性をもっているのか、今後、他資料の状況を見ながら検証する必要があると考えている。

注

- 1 『上方はなし』では笑福亭松鶴の署名入りで筆録されているが、速記者については嘶の一つ一つについて必ずしも明らかにされているわけではなく、多くを四代目桂米団治によっていることが伝えられるのみである。一部は松鶴本人が記し、また中には息子六代目笑福亭松鶴が手伝ったものもあるようである（三田1972及び戸田1997参照）。
- 2 『上方はなし』47集編集後記の記述による。
- 3 『上方はなし』解題による。
- 4 四代目・六代目松鶴による「天王寺詣り」はいずれも「古今東西嘶家紳士録」（APPカンパニー）に収録されているものである。
- 5 ただし、金沢（1998）は近代大阪語においてサカイ（二）がヨッテ（二）を圧倒していく流れを捉えつつも、両表現の使い分けには判然としない面があることを指摘し、「全く異なる語形（表現）が、ほとんど同一の機能を持つものとして同時代に（それも比較的長い期間）並立し得たのかという点にも、依然として積然としない（165頁）」思いを抱かざるを得ないことを述べている。
- 6 調査演目を嘶家別に示すと次の通りである。馬部屋・盲の提灯・後へ心がつ

かぬ・鋌盗人・恵比須小判・日と月と下界旅行・動物博覧会・絵手紙（以上、二代目曾呂利新左衛門）・近江八景/小噺・たん医者・近日息子（二代目桂文枝）・儉約の極意（三代目桂文団治）・天神咄・魚売り（以上、三代目桂文三）・亀屋左兵衛・蛸の手・きらいきらい坊主・煙管返し・いびき車・芋の地獄・さとり坊主（以上、初代桂枝雀）・日和違ひ・電話の散財（二代目林家染丸）・一枚起請・いらちの愛宕参り・魚尽し・平の蔭・理屈あんま・やいと丁稚・浮世床（以上、四代目笑福亭松鶴）・長屋議会（桂文雀）

- 7 「くしゃみ講釈」は音声資料の用例数が少ないこともあるが、ノデが見られる点において特徴的な演目である。同噺は速記本でもノデを多用しており、素材・話題の影響があることが想像される。例えば、次のように丁寧体で語る箇所でもノデ使用が目立つ。

・（傍白）日が暮れると追出されますので仕方なしに講釈小屋へ参ります。

（速記本・くしゃみ講釈45集・670・下19）

傍白部分であることとともに、主節の述語部分で現実の世界にある事実を述べ、その事象に対応する理由として従属節がある。矢島（2003）で述べた〔対象型〕（対象領域のレベル・命題のレベルで従属節と主節の呼応が表現される。益岡1997：79～参照）の特徴を示す用法である。たまたま同噺の話題の影響でそれらの諸事情が重なって、用例数の偏りを生み出している面があると考えられる。

- 8 注7に述べたように、「くしゃみ講釈」中のノデの例には、ノデを使用する蓋然性が見出せるものが多く、その点をどう考えるかによって見方が変わってくるところがある。
- 9 このことから、ノ・モノ＋断定＋接続助詞の用法は文字資料に馴染む、いわば書きことば性があるのではないかと考えることもできる。しかし、本論の以下に述べる通り、「船弁慶」以外の演目「天王寺詣り」、「くしゃみ講釈」にはこの形式例は少ない。従って、同表現に書きことば性があるというような見方は成り立たないと考える。
- 10 速記本のうち「くしゃみ講釈」に例が少ないという点は、この話が松鶴自身の速記によって成ったものかもしれないとする4.2.に示した仮説を支持するといえる。
- 11 4.1.にも記したように、基本的には「表現者の個人差（位相差）を反映しやすいこと」と「文法的な用法差が少ないこと」とが表裏にあるところで、原因・理由表現の特徴が実現していたものと見る。矢島（2006）で見た假定表現は対照的に「文法的な用法差」が存在した。そのために、両表現では並立する各形式の現れ方もまた異なっていたものであろう。

参考文献

- 岩崎 卓 (1995) 「ノデとカラー原因・理由を表す接続助詞」 宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下)』くろしお出版
- 榎垣 実 (1962) 「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂
- 金沢裕之 (1993) 「明治期大阪語の順接確定表現く補遺」『岡山大学文学部紀要』20
- 金沢裕之 (1998) 『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 小林千草 (1977) 「近世上方語におけるサカイとその周辺」『近代語研究』第五集
- 清水康行 (1984) 「東京落語資料の問題点若干」『国文学解釈と鑑賞』49-1
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第六巻第5号
- 戸田 学 (1997) 「上方落語—全国共通語としての変貌考」『国文学解釈と教材の研究』42-7
- 永野 賢 (1952) 「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』29-2
- 平山輝男編 (1997) 「大阪方言の特色」『日本のことばシリーズ27大阪府のことば』明治書院
- 彦坂佳宣 (2005) 「原因・理由表現の分布と歴史—『方言文法全国地図』と過去の方言文献との対照から—」『日本語科学』17
- 益岡隆志 (1997) 『複文』くろしお出版
- 三田純一編 (1972) 「別冊『上方はなし』解説」三一書房
- 矢島正浩 (2003) 「近世中期上方語における原因・理由表現」『国語と国文学』80-7
- 矢島正浩 (2006) 「落語録音資料と速記本—五代目笑福亭松鶴の假定表現の用法から—」『国語国文学報』64
- 山本俊治 (1962) 「大阪府方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

付 記

本稿は、平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C）・課題番号 17520298）の研究成果の一部である。本論中の音声資料の引用は、同研究成果報告書に文字化資料として掲載したものによる。所在もそれによって示している。

（やじま・まさひろ 本学助教授）